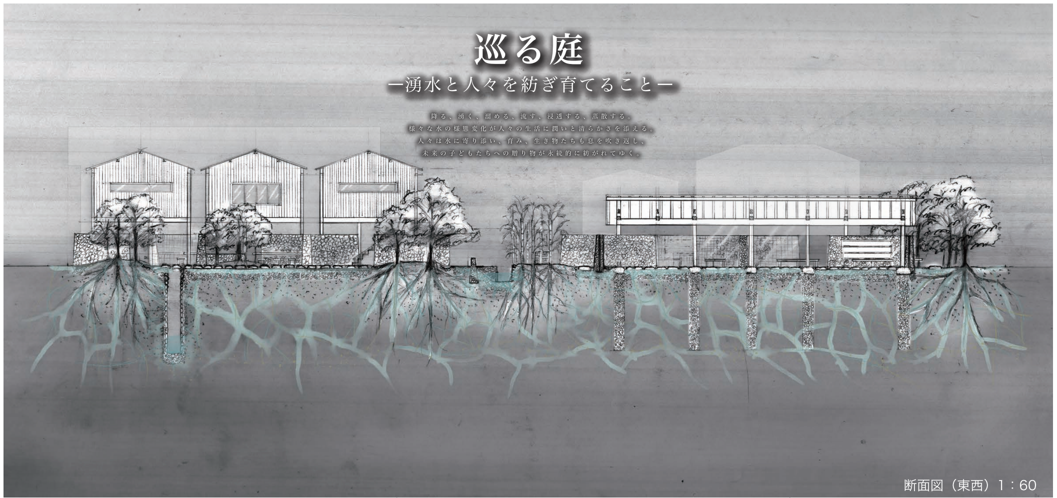
巡る庭

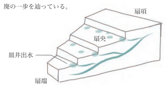
―湧水と人々を紡ぎ育てること―

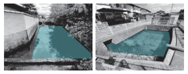
降る、湧く、溜める、流す、浸透する、蒸散する。
様々な水の様態変化が人々の生活に潤いと清らかさを添える。
人々は水に寄り添い、育み、生き物たちも息を吹き返し、
未来の子どもたちへの贈り物が永続的に紡がれてゆく。


断面図（東西）1：60

出水の現状

「出水」とは、川の伏流水が地表面に湧き出た水のことである。敷地のある太田南地区は高松平野の一部で、付近に流れる香東川は、北東方向に開いた扇状地を形成しており太田南地区は扇状地の扇端に位置する。そのため、段差の部分で伏流水が地表面に出やすくなり、出水が多く存在する。古くから人々の生活になくてはならない存在であった出水だが、宅地化や水不足改善にともない荒廃の一歩を辿っている。





皿井・皿井新出水は、湧水の中でも不断泉と呼ばれ、夏季と冬季で湧出量が変化し、灌漑期である夏季には多くの水量を保っている。また、春から夏にかけて水温が気温を下回り、秋から冬にかけては水温が気温を上回る。出水の水は灌漑用として近隣の田を潤す。現在は、香川用水の通水により利用頻度は減少し、壁面はコンクリートで覆われ、高さ 1m のフェンスで囲われているため、出水と人との関わりが希薄になりつつある。

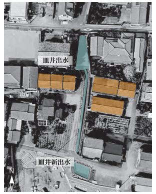
周辺環境

敷地のある香川県高松市太田南地区には、「出水」と呼ばれる湧水が約 19 カ所点在する。そのうちの 2 つである皿井出水、皿井新出水は水路で繋がれており、水路の両側には空き家となった借家が並んでいる。西側の空き家は 2 階建てが 3 棟、東側に平屋が 2 棟あり、どちらも築 50 年の木造住宅である。また、北側に小学校、南側に太田南皿井公園があり、子どもが多く行き交いする場所である。

西側空き家

東側空き家

↑太田南小学校・太田中学校



↓太田南皿井公園

問題点

○出水荒廃による危険

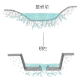
整備される出水がある一方で、利用されなくなった出水は荒廃が進み、草木がうっそうと茂り、人が寄り付くことができない場所となってしまった。近隣の小学生へのアンケートでは「深い」「汚い」「危険」といった印象が強い。

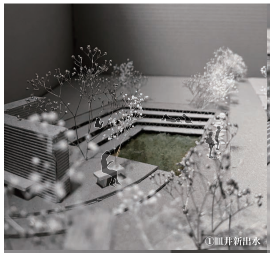
○人々の意識の希薄化

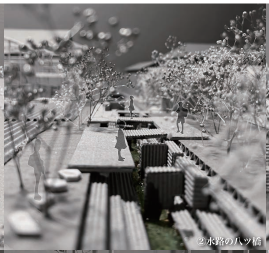
人々のより所であったはずの出水は荒廃が進むにつれて人が寄り付くことも減り、出水の存在が希薄しつつある。人々の出水に対する意識は出水の現存に深く関わるため、再び人々が寄り添える場が必要である。

○舗装による湧水量の変化

湧水を守りたいという人々の思いで、出水の周辺はコンクリートなどの舗装によって囲われた。しかし、人工的に囲われたことによって地下水が湧き出てくる地表面を塞いでしまっている。そのため、湧出量も減少し、埋め立てられる出水があるのが現状である。



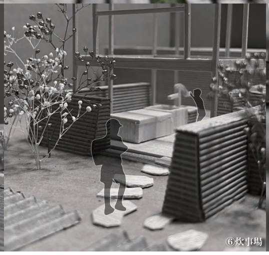

①皿井新出水


②水路のハツ橋

③図書室アプローチ

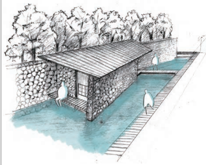
④図書室路地

⑤食堂アプローチ


⑥炊事場

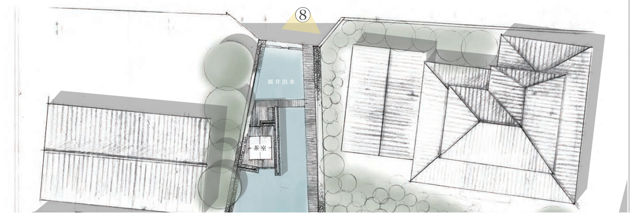
⑦食堂

⑧皿井出水



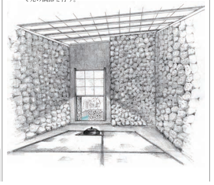
水上の茶室

北側の皿井出水の水上に浮かぶ茶室。
自分が歩いてきた道を望みながらお茶をする。



茶室内観

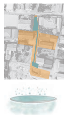
ハの字に配置した蛇籠の壁面をそのまま内壁とする。空気の通り道のある蛇籠壁が普段体験できないような空間にいざなう。水路に向かって開いた開口は上下する障子によって光の調節を行う。



Proposal 1 ―全体計画―

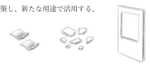
○循環する庭

2つの出水を水路で繋いだ南北に長い敷地全体を１つの庭と考え、縦横に巡ることができるプランを創出する。また、平面的な「循環」だけではなく、断面的な水の循環を描き、敷地全体が水の器となる。



○空き家の利活用

かつて、宅地化に伴って建てられた築５０年の空き家をすべて解体するのではなく、一部の部材を再利用しながら再構築し、新たな用途で活用する。



○多世代交流の場

周辺環境から、小中学生が多く行き交う場所であるため、子どもたちを中心として多世代をつなぐ役割を担う。近隣の小学生に実施したアンケートによると、子どもたちにとって「文化・歴史を学べる場所」、「憩いの場」であるため、子どもが育つ場所として計画する。西側の３棟は、『子ども食堂』として食育を、東側の２棟は『図書室』として地域教育を行う場を形成する。

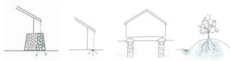
子ども食堂 × 図書室
＝ ＝
食育 地域教育

子ども食堂は、運営する人、調理する人、食材を提供してくれる人など様々な地域の人々が関わることによって多世代間の交流が生まれる場となる。

Proposal 2 ―巡り × ○○―

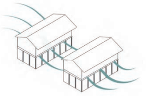
巡り × 水

水は、海のから雲となり雨となって地上に降りてくる。そして、地中にゆっくりと浸透し、また海に戻る。しかし、現在の地表面はコンクリートで固められ水がうまく地中に浸透できずにいる。敷地全体が水の器のように水をゆっくり浸透させるために、蛇籠や側溝、石敷き、植林などの方法で雨水を分散させる仕組みを散りばめる。



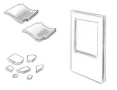
巡り × 空気

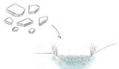
現代の住宅は四方壁で覆われた住宅が基本である。しかし、大地に息吹く風を遮るものでもある。空き家の改修では、一階部分の壁を全て取り除き、風の通り道をつくる。一階部分は木造軸組のみとなるため、芯にコンクリートを用いた蛇籠壁と軸組を固定し強固なものとする。



巡り × 素材

空き家の利活用は、すべてを取り壊すのではなく、使える素材は最大限に活用できるようにする。例えば、建具や瓦、基礎のコンクリートなど。

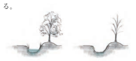




現在の地表を改善するにあたり、コンクリートを砕いたガラが発生する。そのガラを蛇籠や側溝に再利用する。

巡り × 季節

皿井・皿井新出水は、夏季の灌漑期に湧出量が増加し、冬季の非灌漑期には地下水位の低下により枯れてしまう。そのため、水の水位の変化と植えた木々の変化によって季節の移りかわりをうかがえる。



巡り × ヒト

図書室と子ども食堂は子どもを対象とした建築物になるが、子どもを中心として多世代が関わる空間を目指す。子ども食堂では地域の人々の協力が必要不可欠であり、この場所が地域の交流の場の中心となる。

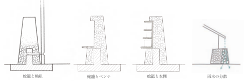
巡り × 空間

二つの出水が細い水路でつながり、田畑へつながる水路へと湧水を導く。この場所を、水を媒体とした循環する環境帯へと改変することが目的である。天からの恵みである雨水、大地からの湧水、この二つの恵みを自然素材の石・木によるささやかな所作によって、豊かな水空間へと導く。

システム

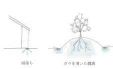
○蛇籠

建物に付属する蛇籠にはコンクリート基礎を用いて軸組を固定する。
また、雨水の分散、空気の通り道としての役割の他、ベンチや本棚として活用する。



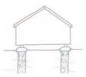
○側溝

雨落ちや段差のある部分には
側溝を設け、雨水の分散を促す。



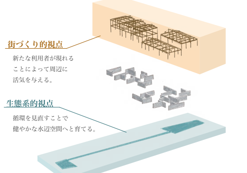
○砕石杭

空き家の杭は「砕石杭」を用いて、
地盤改良を行い、土中環境を向上させる。



タテ・ヨコの関係

街づくり（空き家）、生態系（水の循環）での「滞留」を改善することで、敷地全体の大きな循環に繋げていく。

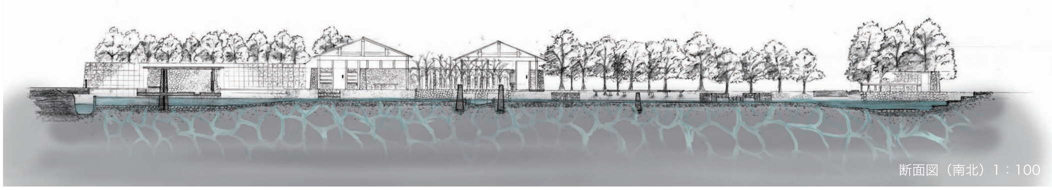


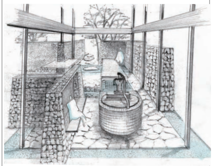
街づくり的視点

新たな利用者が現れることによって周辺に活気を与える。

生態系的視点

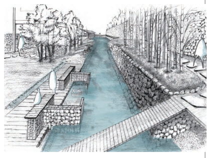
循環を見直すことで健やかな水辺空間へと育てる。


断面図（南北）1：100



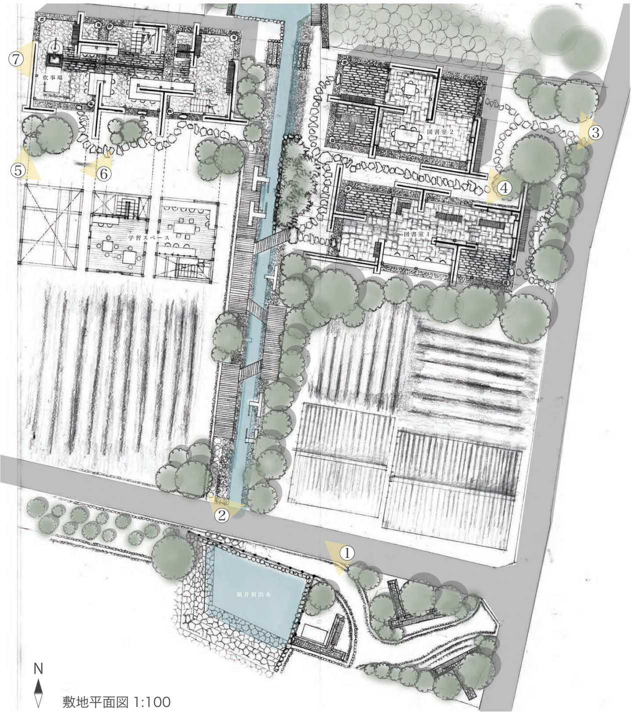
子ども食堂の台所

３棟が並ぶ子ども食堂は、一番奥の棟に台所がある。台所の水は井戸から地下水を引き利用する。井戸のポンプからあふれた水は石畳へと浸透し再び地へ戻る。蛇籠の壁面を掘り込み、ベンチを設け、カウンターテーブルを設置するなど多様な活用を行う。



水路の親水空間

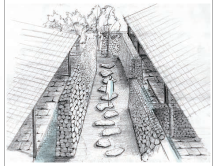
八ツ橋を渡り終えると図書室に繋がる橋と子ども食堂に繋がる板敷きの道に別れる。水路にも座ることができる小スケールの蛇籠を配置している。蛇籠で囲われた部分は、動植物の観察、畑でとった野菜の泥落としなど親水空間として利用される。



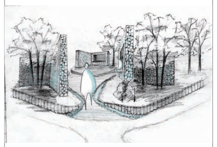
敷地平面図 1:100

図書室路地

図書室は、児童書の他、出水などの地域資料を取り扱い、子ども、大人問わず集まることができる図書室となっている。本棚は蛇籠壁にはめ込み、本棚も空間に溶け込む形とした。蛇籠壁に挟まれた路地は、風の循環を感じることができる場所である。



庭の入り口

この庭の最初の入り口である。蛇籠壁の間を通り抜けると二手に別れ、公園側と庭に向かう。庭のアプローチ空間は庭と周辺空間との中間領域の役割を担い、庭へ進む前にひと休みしたり、待ち合わせ場所になったり、人々が自然に集まってくるような空間となる。